

# 本文章已註冊DOI數位物件識別碼

## ▶ 『平家物語』と女性悲話

doi:10.29714/TKJJ.200205.0001

淡江日本論叢, (11), 2002

作者/Author： 陳伯陶

頁數/Page： 1-41

出版日期/Publication Date：2002/05

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

<http://dx.doi.org/10.29714/TKJJ.200205.0001>



*DOI Enhanced*

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，是這篇文章在網路上的唯一識別碼，用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 <http://doi.airiti.com>

For more information,

Please see: <http://doi.airiti.com>

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE



# 『平家物語』と女性悲話

淡江大学荣誉教授

陳 伯陶

## 論文摘要

『平家物語』は周知の通り軍記物語である。従ってその性格上、戦争を主眼とした物語の進行やそれに連なる背景を語るものであることは言うまでもない。しかし、この『平家物語』という名著を読むたびにいつも遺憾に思うことは、物語全般を通して、その裏に隠された女性たちの悲哀と涙が行間から読み取れないことを痛感する。そこで本小論においては、物語を通して今まであまり注目されなかった女性の悲話に触れ、更にその物語の史実と虚構を専門書から考察・検証し、筆者なりの指摘を試みた。その内容としてはまずこれを①脇役としての恋人たち、主に白拍子や身分の低い女性たち、そして②后、③人妻、最後に④二人のヒロインとして平清盛の妻時子（二位の尼）とその娘徳子（建礼門院、高倉天皇の中宮、安徳帝の母）を例にとり、全巻を通してこの女性悲話の中で、平家一門で一番悲惨な一生を送った平重衡の妻大納言典侍（本名輔子）と、二人のヒロイン時子と徳子親子に的を絞って詳しく検証すると共に、『平家物語』前半では全然顔を見せなかった時子が、一旦緩急の際に取った凛々しい決断と、徳子（建礼門院）の性格から推して最終巻の「灌頂巻」で後白河法皇を前にした堂々たる「六道談義」の可能性を考究し、それが後からの付け足しであることを立証するのが本小論の意図するところである。もちろん徳子とほぼ同年代の源頼朝の妻北条政子との比較もまた格別興味深いものであることを付け加えるものである。

キーワード：

王法、仏法、因果応報、六道談義。

## 一、始めに

『平家物語』は、今日に至るまで長い年月にわたって人々に親しまれてきた。日本人なら、『平家物語』を通読していなくても、その名前は知っているはずである。周知のとおり、『平家物語』は日本の名著であり、軍記物語である。又『平家物語』には読み本としての版本と語り本としての版本がある。この語りの『平家物語』は、盲目の琵琶法師によって語り継がれたいわゆる「平曲」と言われる調べが延々と今日にまで伝わっている事から、『平家物語』に接するには、必ずしも高度の知識・教養・鑑賞能力等を必要としなかったし、またそこに、『平家物語』が当時平安朝時代の、文盲の一般大衆に受容された一因が潜んでいる。

さて前篇『平家物語と諸行無常』を『淡江日本論叢』第十輯に発表して間もなく、それでは『平家物語』の上面を撫でただけで、まだその裏面に触れていないという感が深く、故にここで更に『平家物語と女性悲話』をテーマに、その続編として「戦争の陰に泣く女性」の真相を描き出し、『平家物語』がいかに女性の悲しみを描き、又何が欠落しているのかを小論の目的とした。もちろん『平家物語』は軍記物語であるので、勇壮で残酷な描写が主体であり、戦争の陰に泣く女性の話はいらない、と横槍を入れる御仁もいるかもしれないが、戦争の犠牲者としての女性こそ、この戦争を起こした男性が銘記すべき課題であり、このことは先の第二次大戦期にも、又現代にも共通する事実であり、それを出来たらこの小論文を通してはっきりと示したい。そこで本論に入る前の伏線として『平家物語』の概要についてそっと触れ、それを本論への繋ぎとするものである。

### 1. 『平家物語』の内容

『平家物語』の内容は天承元年（1131）に平清盛の父忠盛が、鳥羽院の御願寺長寿院を造営した功績により昇殿を許された時のエピソード（巻一「殿上闇討」）に始まり、建久十年（1199）に清盛の曾孫六代が処刑されて平家の子孫が絶滅するという終章の「六代披斬」（維盛の子、巻十二）まで、五世代約七十年におよぶ平家一門の興亡の過程をその対象とし、前後に「祇園精舎」と「灌頂巻」を対比させ、それによって平家の罪業と贖罪を増幅した。しかし、我々が日本史や世界史を読む時、戦争には勝敗はつきものであること、そして「勝てば官軍」式の勝敗によって功罪を論ずべきではないことをいっつもながら痛感する。もちろん、ここで『平家物語』の内容を詳しく述べる事は本論の

主旨ではないので物語の詳細は省き、筆者が『平家物語』に描かれている諸々の手法を考証しながら、その不自然で且つ矛盾を感じるところをかいつまんで述べるものである。

## 2. 『平家物語』の滅びの原理——王法・仏法の蔑視

まず『平家物語』の主眼は元来神聖なる「王法・仏法」の護持を<sup>ないがし</sup>蔑ろにしたから平家は滅ぶべくして滅んだということわりである。もちろんこれが次の平家一族を悪者として扱う主因をなしている。それでは果たして平家が本当に王法・仏法を衰亡の深淵におとし入れたのかを『平家物語』（以下単に『平家』と呼ぶこともあり得る）全篇の叙述から考究する。

日本は古代から善悪の基準を朝廷への順逆に置き、更に中世の宗教色豊かな時代においては、仏法の護持が最高原理とされてきた。まず源平の闘争の結果から見る。例えば、諸本のなかでも最古本とされる延慶本の第六巻の末尾に「右大將源頼朝の果報、目出たき事」という章を立て、平家を滅ぼした頼朝の「果報」を次のように述べている。

そもそも、征夷大將軍前右大將（頼朝）、すべて目出たかりける人なり。……仏法を興し、王法を継ぎ、一族のおごれるをしずめ、万民の愁ひをなだめ、不忠の者を退け、奉公の者を賞し、あへて親疎をわかず、まったく遠近をへだてず、ゆゆしかりし事どもなり（注1）。

ここで特に頼朝の果報について述べる際にも、平家の、特に平清盛の奢れ、猛き様を前に語り、それが王法、仏法の衰微を来したから敗戦の憂き目にあった、いわゆる因果応報論で平家を捕らえ、反面頼朝を正義の味方として扱っている。確かに平家は平安京の北の鬼門に位置する延暦寺を焼きはらい、東大寺まで延焼させた。そして朝廷においては、後白河法皇をも幽閉せんとした事は史実であるが、当時の朝廷及び仏法(寺院)自体は乱れに乱れていた。平家に肩入れするわけではないが、平家の横暴は確かに存在した。しかしそれが王法・仏法の蔑視に繋がるとは限らない。王法自体、朝廷は朝夕権力闘争に明け暮れ、仏法にしても第一巻の「額打ち論」で言うように、永万元年（1165）秋に崩御した二条天皇の葬儀に際して、延暦寺と興福寺が葬所の額打ち（墓所の周囲に寺院名を記した額を懸げること）の序列をめぐって争ったこと、更に両寺の確執は続き、延暦寺の僧兵が興福寺の末寺、清水寺を焼き打ちするという事態を引き起こし（巻

一「清水寺炎上」)、仏法自体が常軌を逸していた。

要は、平家滅亡の原因を王法・仏法の軽視・破壊に因を置き、そしてそれが因果応報の果を招き、平家が滅んだのは自業自得であると『平家物語』は言う。従って『平家』を単なる文学作品として読む場合はそれで良いが、歴史書としては、余りにも作者の主観が強すぎると言わざるをえない。それというのも、『平家物語』を著述した作者は鎌倉時代の公家であった。その理由として考えられることは、当時の鎌倉幕府に迎合すると共に、今まで権力の座に胡座をかいていた公家衆が、平清盛の台頭によって昔の栄華が失われ、「平家時代になってから世の中が悪くなった」という落ち目に対する公家層の鬱憤の吐けどころとなり、更に「平家が金持ちになった」事にやっかみを感じ、それに対する反発ではなかろうか。が、これは必ずしも公平な見方ではない。事実平家時代には、それ以前に起こった保元・平治の大乱は起こっていないし、平家の天下になって特に悪くなった事実は無い。ただ、時代が変革期に入っていたから、何となく落ち着かない世の中になったことは事実で、その動きについてゆけない公家連中は、「いやな世の中になった、これも平家が天下を取ったからだ」と考えたに過ぎない。更に平家が金持ちになったというやっかみは、平家が貿易に従事して富を築き挙げたのに対して、当時の公家衆が権力の座にしがみついて、「無為徒食」の日々を送っているのとは、全然比較にもならない。この意味で『平家物語』は皮肉にも平家出身ならぬ人が描いた「平家」の世界である。その証拠に巻一の「吾身栄華」の最後に、

ようしゅう こがね けいしゅう たま ごきん あや しょうこう しちまんぼう ひつつ かけ  
楊州の金、荊州の珠、呉郡の緩、蜀江の錦、七珍万宝、一つとして關けた  
る事なし。

といっている部分は、まさに平家の世になってから世の中が富裕になったことを言っている。更に付け加えると、源平両氏が朝廷の番犬的存在だったというのも、現代の目から見れば少し違う。源氏はむしろ藤原氏の番犬として成長したもので、平家は院（上皇）の番犬として成長した。院というのは平安後期に生まれた権力機構であって、本来律令体制（天皇）をはみ出したところに生じたものである。院政に入ってそこに平家が勢力を伸ばすと、今までしたい放題の事をしてきた公家達がいろいろと束縛を受け、不平不満が募り、その手になった『平家物語』は自ずからこういう形となって現れてくるのは自然の理であろう。

### 3. 琵琶法師による語り本の仏門帰依

『平家物語』は大別して「語り物系」と「読み物系」の二種に別れ、前者は更に「八坂流」と「一方流」の二つに分けられる。「八坂流」は十二巻、「灌頂の巻」を特立せず、「一方流」はそれを特立して十三巻となっている。そして平曲としての「八坂流」は途中で滅び、現在わずかに残っているのは一方流のみである。「屋代本」や「中院本」は八坂流で、「覚一本」や「流衣本」は一方流の諸本である。これに対して「長門本」（二十巻）や「延慶本」（六巻十二冊）、『源平盛衰記』（四十八巻）は読み物系とみなされている（注2）。かように『平家物語』の版本が多く、取捨に困惑するので一応斯界の権威を持つといわれる岩波書店昭和34年出版の日本文学大系『平家物語』をテキストとして用いた。この『平家物語』では、前の六巻は平家の罪業を数え上げ、それが故に平家が滅亡したことを力説し、後半の六巻では源平の合戦をつぶさに描き、その中で諸々のエピソードを盛り込んで、最後に建礼門院の六道談議並びに天国に上ることで締めくくっている。

さて、平曲（『平家物語』を語る法師）が今日まだ細々ながら伝えられたのは、ひとえに琵琶法師のおかげといっても過言ではない。元來法師という語源は仏語から来ているもので、出家して仏道を修業し、仏法に精通して、衆生を正しく導く師となる者を指すのが本来の意味であるが、ここで言う琵琶法師とは、盲目で宗教的儀礼に琵琶を弾く盲僧と、宗教に関係なく琵琶の伴奏で物語る放浪芸人を指している。これは鎌倉中期以降のことで、ここでは主として『平家物語』を琵琶で語る盲目の法師を指す（小学館『国語大辞典』）。この注釈から分かるように、琵琶法師が琵琶の伴奏で平家物語を語る場合、主に寺社の祭礼に群衆が集まる時を利用して語られるのが普通であり、それゆえに後から琵琶法師によって増減された部分が多く、現在の研究では上記のような版本が多出している。更に寺社の祭礼において平曲を大衆に聞かせるとなると、どうしても仏教色が濃くなり、特に当時の念仏思想を押し出した浄土宗の影響で、物語に出てくる主役や脇役たちの結末のほとんどが仏門に入ることとなる。このコースを辿るのがこれから述べる女性たちと、平重盛である。これは人々が琵琶法師の語る「平曲」を聞くと、登場人物の中に自分たち庶民の姿を見出し、その人生に対して悟りにも似た心情に共鳴し、哀れさの中にも、登場人物が仏門に入って仏によって救われるということで、ほっとしたのを感じたのであろう。古来、民衆の同情と共感、物語の主人公に永遠の命を与

えることに救いを感じるものである。そこに語りの『平家』と読む文学の違いがある。

以上のことを伏線として本論文の主題女性悲話に入る。『平家』に登場する女性は、大別して恋人たち、妃、人妻と分けられるが、ここでは妃の項は二代妃（多子）を特に詳しく述べ、人妻の中では物語のヒロインとして建礼門院と清盛の妻時子（二位の尼）を特出し、それを脇役としての恋人たち、妃、人妻、更にヒロインとしての時子親子の順に述べることにする。

## 二、脇役としての恋人たち

### 1. 祇王・祇女・仏御前

祇王・祇女・仏午前（巻一「祇王」）は共に白拍子<sup>しらびょうし</sup>である。白拍子というのは、平安朝末の舞姫で、鼓<sup>つづみ</sup>や笛、銅拍子<sup>どうびょうし</sup>の伴奏で舞を踊ることを職業とし、その芸を売り物にする舞姫のことである。祇王は妹の祇女と母の刀自<sup>とじ</sup>と二代にわたる白拍子で生粋の踊り手であった。その芸の見事さにやがて祇王は時の最高権力者、平清盛の屋敷に迎えられ、寵愛を受けるようになる。それにつれて妹の祇女の人気も高まり、当時の都を代表するスターの座にのし上がった。更に清盛は姉妹の母刀自の為に家を作ってやり、しかも毎月米百石、銭百貫を与え、一時の祇王・祇女ブームを作り、幸福の最高潮に浸る毎日を送るようになる。ところが三年後新たなライバルが現れる。名を仏という少女で、たちまち都の人気者になり、評判が上がると共に、仏御前は清盛に自己の舞を見てもらうことを願い、西八条にある清盛の屋敷に赴くが、すげなく面会謝絶の目に会う。その時祇王が救いの手を差し伸べ、清盛にとりなし、仏御前の舞を清盛が見ることになる。しかしこれがきっかけとなって、清盛の心が仏御前に移る。仏御前はドライな舞姫ではあったが、ただ単に清盛に自分の舞を認めてもらいたかっただけで、別に清盛の寵愛を受ける魂胆は無かった。しかし、ここに清盛が心変わりして祇王を追い出し、仏御前がその後釜に座ることになった。なんとも皮肉な結果である。清盛から追い出しを食った祇王はすごすごと今までの栄華を捨てて御殿を出る。去り際に襖に自分の今の気持ちを三十一文字に託す。

もえ出るもか(枯)る、もおなじ野辺の草いづれか秋にあはではつべき（巻一『祇王』）

（春になって萌え出る草も枯れる草も、皆同じ野辺の草であってみれば、どれも秋に

あわないですむはずは無い)

祇王はこの短歌で、いま仏御前は寵愛を受け、私は捨てられるけれども、いずれ野の草のようなはかない命（いつかは飽きられて枯れてゆくのだ）、その人間のはかなさを言いたかったのであろう。これが伏線となって後に仏御前が清盛に捨てられたとき、祇王のもとへ赴き、一緒に仏に帰依するきっかけとなる。

しかし、仏御前がまだ清盛の寵愛を一身に受けている間、清盛から祇王に使者がきた。彼が言うには仏御前が退屈しているから、祇王に「仏御前の前で舞を舞って慰めてくれ」、と言う清盛の要請である。祇王はいつそ田舎に移り住み、清盛の前から姿を消すか、身投げしてしまいたかったが、母の刀自は「私への孝行と思って行ってくれ」とせがみ、祇王は泣く泣く仏御前の前で踊らされる羽目になる。

なくなく又出<sup>いで</sup>立ける心のうちこそむざんなれ（巻一「祇王」）

まさに哀れな祇王の姿であった。自尊心を傷つけられた祇王にとっては死ぬより辛い日々だったことだろう。祇王が二十一、妹の祇女は十九、母の刀自は四十五、遂に三人は惜しげもなく俗生活を捨てて尼になり、嵯峨野の奥に移り、小庵を構えて念仏三昧の生活に入る。そして間もなく仏御前が祇王の小庵を夜中尋ねてくる。仏御前が言うには、

清盛の寵愛を受けても心はいつもあなたたちのことが心配でたまりません。特にあなたが襖に書かれた『いづれか秋にあはではつべき』を見るにつけ、心が痛み、もう矢も盾もたまらず尋ねて来たのです。

この世の栄華は一時の夢、思い立った時に仏縁を得られなかったら、地獄に堕ちてしまうから、今朝早く屋敷をそっと抜け出しました。

かくて仏御前を入れた四人は一つの庵で朝夕念仏を唱え、後には心静かに往生した、と『平家物語』は言う。

しかし、ここでいくつかの疑問を投げかけてみる。

①祇王・祇女・仏御前の三人は『平家』においては脇役であるが、果たして実在した人物であるのかは、確かめる術も無いが、筆者はフィクションと見ていいと思う。要は



脇役を入れることによって往生念仏の希求の激しかったその頃の人々の共鳴を引き起こすために挿入したのではなかろうか。特に登場人物が白拍子(当時の花形芸能人)であり、彼女らのように貴人の寵愛を受け、ときめいた舞姫はかなりいたのではないかと思う。

②本当に恋人であったのか。平安初期において貴人が妾を何人も持つことは、一般に容認されていた時代で、清盛に祇王に対する愛情があるか否かは不問にするとして、それでは祇王が本当に清盛に対して愛情を持っていたのかが疑問視される。とくに栄華を手に入れることを念頭に入れての愛情となると、祇王の愛情は甚だ疑問視されて当然である。祇王が自尊心(嫉妬心)によって清盛の招きに応じようとしなくて、母の刀自は「親孝行すると思って行ってくれ」と言うくんだり、母が昔の栄華に一縷の夢を託している、という庶民的感觉から解釈出来ないだろうか。

この祇王の描写の部分は短編としてかなりよくまとまっているが、最後に仏御前が尼となって現れるくんだり、意外性があるが、あまりにも不自然であり、わざとつけてつけた感を拭い去ることが出来ない。それは作者が、或いは語り文学の創作者としての琵琶法師が、「平曲」を聞く民衆の拍手を予想して作られたのではないかと勘ぐりたくなるような結末である。しかし、その反面、現代のわれわれには、この巻にあまり魅力を感じないのではないかと思う。それは

- i 第一に物語の筋があまりにも仏教説話でありすぎる。現代の人間はこうした悟りの世界には初めから不感症なのである。
- ii 第二に登場人物があまりに類型的である。祇王も仏御前、そして刀自も、そこには何の個性も感じられない。かろうじて仏御前には、若い女らしいドライさ、気の強さを感じさせるが、個性的というほどではない。また刀自に至っては、あまりにも通俗的・常識的な母親でありすぎる。
- iii 第三に、この巻の最大の欠点は、平清盛の性格をまったく捕らえていないことである。ここに登場する清盛は、まったくの暴君である。気まぐれに祇王を仏御前に乗り換えるだけでなく、祇王の気持ちを考えようとせずに、再び祇王を呼び寄せて恥をかかせる。まったく思いやりの無い、無神経な男として描かれている。が、実在した清盛は、こんなおろかな男ではない。元来『平家』の作者は清盛に対して好意的な立場を示していないことは前述したとおりであるが、この巻での清盛の扱いはあまりにも類型的な悪役でお粗末であるという誹りを免れ

ない。現実に清盛は院政期に画期的な活躍をし、平家時代を作り上げたなかなかスケールの大きい、決断力に富む政治家でもあった。時としては、確かに無神経的なごり押しもしないではないが、これはむしろ政治上での事であって、それがすなわち個人的にも非情な男であったということにはならない。しかし、この作者の故意の筆致は、聞く人に少なからず清盛に対してひどく悪い印象を植え付けたことであろう。

iv 第四に、この『平家』に登場する女性達はほとんどが高位高官である中で、彼女たちは身分の低い白拍子である。彼女たちはただ哀れな存在だっただけではない。むしろ貴族に先立って現世の榮耀<sup>えいよう</sup>のはかなさに気づき、仏教に帰依して静かに往生した。祇王たち庶民の代表は、平家が榮華をきわめている最中に、早くも出家して平家を離れ、その滅亡の渦中に巻き込まれることを免れた。その意味で彼女たちは人生のチャンピオンであり、当時の人々に深く染込んでいる専修念仏を、女性の身ながらいち早く実行した人として、人々は彼女に限りない拍手と憧憬すら感じたであろう。こうして考えてみると、この「祇王」のくだりは民衆の意に迎合して「後から挿入された」ものと推測される。人々は琵琶法師の語る「平曲」を聞くとき、彼女たちが実在したか否かにかかわらず、その中に自分たち庶民の姿を重ねあわせ、その人生に対して見開かれた眼差しの深さに感嘆し、哀れさの中にも、ほっとした救いのようなものを感じたのではなからうか。古来、民衆の同情と共感は、物語の主人公に永遠の命を与えることで満足したことと考え合わせ、この項が後から挿入されたという確信を更に強くするものである。

## 2. 葵御前・小督局<sup>こごうのつぼね</sup>

『平家』は軍記物語であるが、どういうわけか本筋にかかわりの薄い脇役の女性の方が有名である。清盛の愛人だった祇王・祇女もその代表的な例であるが、高倉天皇に愛された小督局も同じ轍を踏むものである。彼女はいわば脇役の又脇役である。もともと高倉天皇自身が若くしてこの世を去ってしまい、『平家』の主役でありえなかったのだから、その愛人である小督局はほんの添え物といった存在に過ぎないのだが、にもかかわらず、人々に良く知られているのは、その描かれ方が、非常にロマンチックで、彼女の哀れな運命が人々の心を捉えたからであろう。が、小督局を語る前に<sup>あおいのようこ</sup>葵女御と呼ばれ

た女性について触れなければならない。『平家』の中では、「葵女御」（巻六「葵前」）と小督局（巻六「小督」）は続いていて、それで一つの物語となっていると言った感もないではない。

A. 葵女御は正式の名前ではなく、<sup>あおいのまえ</sup>葵前というのが本名で、身分階級を重視した当時では、もともと女御になれるような家柄の女性ではなかった。女御というのは、天皇の妃として正式に認められた女性だけに許された称号である。当時の天皇の正妃は中宮とか皇后とか呼ばれ、その下に女御、更にその下に更衣<sup>こうい</sup>と呼ばれる女性がいた。女御や更衣になれば、位をもらい、その中から選ばれて中宮になることもある。したがってかなりいい家柄の公家の娘でなければ女御にはなれなかった。

高倉天皇の中宮は周知のとおり平清盛の娘、徳子である。葵前はこの徳子に仕える女房の召使である。が、生まれつき美しかった葵前は、間もなく高倉天皇の目にとまり、寵愛を受けるようになる。中宮徳子は高倉天皇より四つ年上である。十六歳で徳子が入内<sup>じゅだい</sup>してきたとき、高倉天皇は十二歳、この少年天皇は姉さん女房が苦手で、この心理は青年になった後も拭いきれなかったようである。その点、葵前はまだ少女らしさの抜けきらない、初々しい美女であった。青年天皇は彼女によって年下の女性をいとおしむことを知らされたのかもしれない。『平家』はこの高倉の心境を

ただよのつねのあからさまにてもなくして、主上つねはめされけり。まめやかに御心ざしふかくあかりければ（巻六「葵前」）

と書いている。かりそめの恋、普通一般の関心の持ち様ではない、もっと真剣なものだったということだ。人を愛するとはこういうことだ、とおそらく高倉天皇は葵前によって初めて愛の世界を知ったのではないだろうか。人々は天皇の愛情の深さを知り、ひそかに葵前を葵御前と呼ぶようになる。しかし『平家』では、この噂が広まると、高倉天皇はふいに葵前を寵愛するのをやめてしまう。もちろん、高倉にしても初恋であり、なかなかそうたやすく忘れられるものではない。そしてその恋焦がれる心を『拾遺集』の恋の部にある平兼盛<sup>たひらのかねもり</sup>の名歌で心境を表している。

しのぶれどいろに出にけりわが恋はものやおもふと人のとふまで（巻六「葵前」）

（注3）

まさに夕立のようなはかない恋物語である。そして葵前は宮中を去り、家に帰って五、六日床についてにわかにかこの世を去ってしまう。まさに劇的な展開である。

この短い恋物語において、『平家』は高倉天皇が葵前の寵愛をやめた理由として挙げているのは、別に愛情が薄れたためではなく、天皇の地位にあるものが、好き勝手な愛情の対象におぼれて世の誹りを受けることを憚った、というものである。

さて、このミニ恋物語において『平家』が書いている物語に少々異を唱えてみたい。

①第一に、高倉天皇が急に葵前を遠ざけた理由について、『平家』では高倉天皇を聖人君子として描いているが、これは高倉の単なる道徳的な抑制心ではなく、むしろ当時の権力者平清盛に対する遠慮が大きかったのではないだろうか。中宮が清盛の娘徳子である以上、徳子を差し置いて葵前を寵愛した場合、それが清盛の耳に入ったらどうなるか、更に万一男子が生まれたら、清盛の怒りは爆発し、更に葵前の身にも危険が及ぶと考えたのであろう。

②第二にこの葵前のはかない物語の後に小督局が続く。それと言うのもここでは高倉天皇を自制心があり、耐え忍ぶという愛の形で高倉帝の性格に重点を置き、それと父親である後白河法皇とを比較したかったのではないかと憶測する。それゆえに葵前は脇役であり、又幻の美女を想像させるに足るフィクションであると考えられる。そしてこれは物語の性質上一種の前座となって次の小督局へと繋ぐ。

B. 小督局は葵前と違ってれっきとした実在の人物である。父は桜町中納言といわれた藤原成範<sup>ふじわらしげのり</sup>という公卿で、その父藤原信西<sup>しんぜい</sup>は、当時きってのやり手といわれた人だった。そして保元、平治の乱後、信西と共に流された成範は最も順調に公家社会に復帰した一人であった。そこには清盛の私情が入っていることはいうまでもない。成範と清盛の娘は、両者の父親を結ぶ絆として結婚させられており、つまり成範は清盛にとって婿の一人であった。しかし、小督の母は清盛の娘ではない。そして小督は中宮の女房の一人となる。彼女が小督と呼ばれたのは、父成範が、左兵衛督<sup>さひょうえのかみ</sup>だったからと言われている(注4)。そして小督も御多分にもれず無双の美人であり、琴の名人でもある。こうした彼女が徳子の側近にいれば、高倉天皇の目にとまらないはずはない。しかし、小督にはすでに恋人があり、恋文を寄せる高倉帝の熱心さに負けて恋人と別れ、高倉帝の寵愛を受ける。これを聞いた清盛は激怒し、小督を召し出して亡き者にしようと

した。この時小督は帝の身に迷惑をかけるといけないから、ある日の夕方、薄闇にまぎれて宮中を抜け出し、姿を消した。高倉には二度目の失恋である。小督失踪、このショックに高倉帝は鬱々として日々を送るしかなかった。それでも諦め切れずに悶々の日を送る高倉帝を見かねて、その下僚が嵯峨野へ小督を探しに行く。

仲国龍<sup>れう</sup>の御馬<sup>おんむ</sup>給<sup>たま</sup>は(ッ)て、名月にむちをあげ、そこもしらずあこがれ行(巻六「小督」)

これは『平家』の中でも映画にすれば最も美しい場面である。そして嵯峨野から嵐山の法輪寺で小督の弾く琴の音色に導かれて小督に逢い、宮中に帰ってくれるように頼む。そして至急取って返し、高倉帝に報告すると、すぐにつれて来いということで、なだめすかして小督を人目につかないところに隠しておき、夜な夜な帝の寝所に召し出す。この時高倉帝にはそれこそ全く命懸けの密会であった。そして小督は身ごもり女の子を産む。これが範子親王<sup>はんし</sup>である。これを聞いた清盛はたちまち彼女を捕らえ、尼にして追い払ってしまう。もともと出家の意思があった小督であったが、かような形で出家させられた小督は不本意ながら嵯峨野のあたりに隠れ住むことになる。そして帝は間もなく病の床につき、崩御する。この王者の恋の結末を『平家』では以下のように書いている。

入道相国「小督<sup>こがう</sup>が失せたりとかは、跡形もなき虚事<sup>そらごと</sup>なり。いかにもして失はん」と宣ひけるが、何とかしてかは、謀<sup>たばか</sup>りだされたりけん。小督の殿を捕へつつ、尼になしてぞ追放<sup>おっぱない</sup>たる。歳二十三。出家は元より望みなりけれども、心ならず尼になされ、濃き墨染にやつれはて、嵯峨の奥にぞ住まれける。無下にうたてき事どもなり。主上はかやうの事どもに、御悩づかせ給ひて、遂に隠れさせ給ひけるとかや(巻六『小督』)。

すなわち帝の死は「こうした事件が原因で亡くなられた」、と『平家』は言う。

しかし、ここではいくつか不自然な筋運びを見出すことが出来る。

①まず『平家』の次の描写を参照してもらう。

主上は、恋慕の御涙に思し召し沈ませ給ひたるを、申し慰め参らせんとて、中宮の御方より、小督の殿と申す女房を参らせらり(巻六「小督」)。

ここでは高倉天皇が昔の葵前との恋の思い出にふさぎこんでおられるのをお慰めしようとして、中宮徳子がわざわざ小督を差し向けた、ということに疑問が生じる。もしそれが真実なら、なぜ徳子は小督をかばってやらなかったのか。小督と帝の恋に一番責任があるはずの徳子が、物語が進行する間に一度も出てこないのはおかしい。また常識から考えてみて、自分の夫に別の女性をすすめるというのもおかしい。これは『平家物語』の作者のぎこちないフィクションで、本当は、高倉天皇と小督の恋は、中宮徳子の全く知らない所で進行してしまったと解釈するほうが理にかなっている。そしてそれを知った中宮は、人並みに不愉快な思いもしたことだろうが、生まれつきおっとりとして控え目な性質の中宮では、何もいえなかったというのが真相ではないかと思う。

②第二に、では、何故『平家物語』は、こうした人間の真情を無視した描き方をしたのか。考えられることは、物語の最後の『灌頂巻』と呼応させるため、中宮徳子をあくまでも理想的な女性として描きたかったからではないかと思う。この理想化された女性がやきもちを焼いたりしては具合が悪いので、小督の問題はあくまでも中宮承知の上ということにし、徳子の心の広いことを殊更言いたかったのではなかろうか。

③更に第三点は、『平家物語』の狙いは、ここで清盛の強引さを際立たせたかったのではないかとも思われる。中宮は帝の恋に寛大だったのに、清盛はカンカンに腹を立てた。こう書くことによって清盛の横暴さを浮き彫りにしたかったのであろう。が、実際には、この時中宮徳子はまだ安德天皇を生んでいないし、さらに清盛の政治的地位も安泰ではなかった。もし、わが娘に皇子が生まれる前に、他の女が皇子を生むようなことがあったら、と心配するのが普通の親の心情であり、ましてや、当時政治的権力を握るためには、わが娘が天皇のお妃になるだけでは駄目で、その娘の産んだ皇子が帝位につかなければ意味がなくなる。清盛にとっては、このときこそ運命の分かれ道に立っていたといってもよく、またこのことから考えてみても、中宮徳子がのほほんとして他の女性を高倉に推薦したりしているひまは無いはずである。『平家物語』は残念ながら、こうした事情を捉えていない。「物語」としては

美しく、見事であるが、政治を見る目に物足りなさのあることは、わざわざ指摘するまでも無いことで、『平家』の弱さを露呈した典型的な部分であろう。

### 3. 千手前

『平家物語』に登場する女性のほとんどが都育ちであるのに、千手前<sup>せんじゅのまえ</sup>は珍しく東国女性である。さらに元来なら平家一門の興亡には無関係のはずである彼女は、不思議なめぐり合わせで平重衡<sup>たひらのしげひら</sup>と関わりを持ち、更に悲惨な一生を送ることになる。

重衡は清盛の五男で、当時本三位中將<sup>ほんざんみのちゆうじょう</sup>と呼ばれ、一門の大將格の一人であったが、一の谷の合戦で運悪く生け捕りになり、鎌倉へ護送されることになる。彼はその前に奈良攻めの総大將として出陣したとき、反平家的な東大寺や興福寺の僧兵を鎮圧するための行動に出たが、この時の兵火によって東大寺が延焼し、有名な大仏も焼け落ちた。仏教信仰の盛んな当時であってみれば、これは天をも恐れぬ大罪として僧兵が重衡を許すわけが無い。鎌倉で頼朝は奈良焼き討ちの責任を追求する。この時重衡は平静に頼朝と対応し（巻十「戒文」）、頼朝も少なからず重衡に好感を抱くようになったが、所詮奈良の僧兵からの追求で死は免れないことを重衡は覚悟していた。重衡が関東へ下ると決まったとき、罪の償いを責められ出家することを願い、心の師法然<sup>ほうねん</sup>に会う。この法然はすなわち浄土宗の開祖であり、比叡山の黒谷に住み、乱世に魂を救う聖として、人々の信頼を集めていた僧侶であった。重衡は法然に南都を焼いたこと、戦いで人を殺した罪の深さに恐れおののいていることを告白する。

けふあすともしらぬ身のゆくえにて候へば、いかなる行を修<sup>じゅ</sup>して、一業<sup>いちごう</sup>たすかるべしとおぼえぬこそくちをしう候へ。情<sup>つら</sup>ら一生の化行<sup>けぎょう</sup>をおもふに、罪業は須弥<sup>しゅみ</sup>よりもたかく、善行は微塵ばかりも蓄へなし。かくてむなしく命おはりなば、火穴<sup>くわけつたう</sup>湯の苦果、あへて疑なし（巻十「千手前」）。

（今日、明日にも殺されるかも知れない運命にある私は、今更どんな行いをして、その罪の一つさえ免れることは出来ないのが残念です。私の生涯にやってきたことを思えば、罪は須弥山よりも高く、善行はちつとも積んでおりません。このまま死んでしまえば、地獄（火）畜生（穴・本来は血）、餓鬼（湯・本来は刀）の苦しみに会うことは間違いありません）

恐怖の絶叫といっても良い。もう自分の命は風前のともし火だ。死ねば地獄。この死に対する恐怖に、法然は浄土宗の仏理を説き、罪を悔い、仏道に帰依するならば、このような末法の世には、仏の名号をとる、つまり念仏・称号こそが大切であると説き、

罪ふかければとて、卑下し給ふべからず（巻十「千手前」）

と慰める。

さて、頼朝の指図で狩野介に預けられた重衡は、そこで千手前に会う。千手前は手越（今の静岡市内）の長者の娘、名前は千手と呼び、美人で心も優しい女性で、この二、三年来御所で使われてきた娘であったが、頼朝の計らいで重衡の世話をするように使わされたものである。もともと頼朝は重衡の堂々たる応対や気品がそなわり、すでに死を覚悟したその態度に好感を持っていた。それで千手前を重衡の接待役（伽をも含めて）にしたが、罪の深さや仏の救いをもとめる重衡には、千手前に情愛は起きなかった。二人は『和漢朗詠集』の歌のやり取りで千手前の優しさと重衡の凛々しさを確かめ合ったに過ぎない。

羅綺の重衣たる、情ない事を機婦に嫉。管弦の長曲に在る、関へざることを人に怒る（千手前）。

これは菅原道真の詩で、意味はなよやかな舞姫をうたったもので、「身に付けた綾織の薄物さえ重たそうな姿を見ると、機織の女を恨み、管弦が長すぎて終わらないので楽人を怒る」ということで重衡の浮かぬ顔をしていることを指し、そんなに気持ちを沈ませることはいけないと暗に言っている。しかし、重衡はそれでも一緒に歌わないので、千手前は更に同じ『和漢朗詠集』の歌を歌った。

十悪といへども引摂す。

（どんな罪人でも救ってあげると言う意味）

その後更に



airiti  
極楽ねがはん人はみな、弥陀の名号となふべし

と今用に歌ったので、重衡の心もほぐれ、やっと千手前の酌で杯をとりなおした。そして重衡は更に千手前に歌を所望する。

一樹のかげにやどりあひ、おなじながれをむすぶも、みなこれ先世<sup>ぜんせ</sup>の契  
千手は心をこめて、この悲運の貴公子のために歌った。重衡もこれに答えて  
燈<sup>ともしびくらふ</sup> 閣<sup>すかうくし</sup> しては、数行<sup>すかうくし</sup> 眞氏の涙（注5）

としみじみ歌う。これは楚の項羽が漢の高祖と戦って敗れたとき、一緒にしたがって  
いた虞美人がほろほろと涙をこぼした故事に習い、敗戦の将の悲しみを歌った詩で、重  
衡の心を語ったものである。しかし二人の間には何も発生しなかった。二人は優雅な朗  
詠のやり取りで一夜の雰囲気をも十分に味わっただけである。敗軍の将のすでに死後の世  
界しか求めている貴公子が、行きずりの一夜に思いがけない心の優しさにめぐり合う  
ことを『平家』は書きたてている。

そして重衡は南都の僧侶に首を切られて死ぬ。千手前はこの一夜のこと以来、重衡のこ  
とが忘れられなくなってしまう。しかし、重衡の死を聞くとやがて出家し、信濃の善光寺  
へ行いすまし、その菩提を弔ったと『平家』は言う。まさに純愛物語である。

しかし『吾妻鏡』では、千手は出家したのではなく、四年後、すなわち文治四年に突  
然急死したという。享年二十四歳であった（注6）と書いてある。

この物語は現在の人にはかなり高尚な純潔恋物語であるが、都の貴公子と東国の平凡  
な女性、死を目前にして必死に悟りを求め、すでに現世には関心がもてなくなった男と、  
そうした歴史的な流れに無縁な、無垢なおとなしい女性との短い一夜の優雅で且つ品の  
ある朗詠集による対話、それでいてお互いに心を通じ合う一夜、何と美しい悲恋物語で  
あろう。これは現代の戦争を知らない世代には「馬鹿らしい」と一笑に付されることだ  
ろう。

#### 4. 横笛

横笛は建礼門院（高倉天皇の中宮、清盛の娘徳子）に仕える雑仕女<sup>ぞうしめ</sup>であった。すなわ  
ちいろいろと雑用を受け持つ下級の女官である（ごく下働きの女性）。そして彼女はこ

れも宮中警護の役についている男性斎藤時頼と恋するようになるが、時頼の父が反対した。

世にあらんもののむこ子になして、出仕なんども心やすうせさせんとすれば、世になき物を思ひそめて（巻十「横笛」）

ここで世にあるものと世になきものと対照的な使い方をしているが、これは生者と死者を指すのではなく、世の中でときめいている者と、時運にも乗れずつまらない暮しをしている者、と言う意味である。要するに息子を権力者の婿にして、官吏相応の出世をもらおう娘でなくては結婚は駄目だということだ。横笛のような雑仕女では身分不相応であるという。

息子の時頼は父の反対に対して思い切って出家してしまう。当時時頼は十九歳。十代の少年が出家し、その後滝口入道と呼ばれるようになる。それを知った横笛は滝口入道の仕打ちに悲憤を感じ、滝口を探しに出かけ、荒れた僧坊から滝口の念誦ねんじゆの声を聞き、

わらはこそこれまで尋たずねまひりたれ。さまのかはりてをはすらんをも、今一度みてまるらばや。（巻十「横笛」）

と申し込むが、滝口入道も迷うがまだ悟りの境地に至らない自分に不安を感じ、横笛と面会しなかった。そして滝口入道は更に奥深い高野山へと登る決心をする。その後横笛も出家して仏道に入ったという。

ここで『平家物語』が二人の読み交わした歌を挙げている。

そるまではうらみしかどもあづき弓まことのみちに入いるぞうれしき（滝口入道）  
（私はあなたが出家するまでは悲しんでいたが、貴方もまことの道に入ったと聞いて嬉しい）

これに対して横笛は

そるとてもなにかうらみんあづき弓ひきとどむべき心ならねば（横笛）

(出家したとて、何であなたをお恨み申し上げましょう。ひきとめることのできないあなたのお心なのですから)

同じように出家した横笛は法華寺という奈良時代以来の伝統ある尼寺に入る。そして間もなく横笛はこの世を去る。これで物語は終わるという至って単純明快なストーリーである。

さて、ここでいくつかの解釈や疑問が残る。

① まず上記横笛と滝口入道の歌の解釈を逆にしてみる。

第一首を横笛とし、第二首を滝口入道の歌として入れ替える。

第一首(横笛): 私も出家するまではあなたを恨みましたが、今は同じ仏道に入り、大変うれしく思っています。

第二首(滝口): あなたが出家したことを決して恨んではいません。第一私自身、それを引き止める心境ではないのですから。

日本語は主語がはっきりしないので、こんなふうにとっちにでも解釈出来るのではないだろうか。

②『平家物語』では、登場人物の描写があまりにも類型的に出来ていて、物足りなさを感じる。それというのも、主人公がみんな早死にするし、さらに判で押したように出家してしまう。この早死にや出家の構想は、要するに彼女等の哀れな運命に同情の涙を誘い、どうせ現世では結ばれないのだから、早めに彼女達を西国の楽土へ往生させるようにわざと書かれたものである。だから彼女等は必然的に類型的存在であり、大衆のヒロインであり、あくまでも美しく、哀れでなければならない。それでなければ共感を得られないからだ。裏を返せば、かような書き方は当時の社会に対する民衆の底知れぬ人生への不信感と現世への絶望感を感じさせられるものである。

### 三、妃たち

妃とは言うまでもなく天皇の正室、すなわち中宮或いは皇后と呼ばれる女性のことである。ここでは、『平家物語』に出てくる妃のうち、祇園女御、二代妃の多子<sup>たし</sup>、そして清盛の妻時子の妹で滋子のいわゆる建春門院の三人を取り上げるが、女性の悲話としてこの小論文で特に取り上げたいのは二代妃の多子で、後の祇園女御は軽く触れ、建春門院の滋子は

時子との関係で説明するにとどめる。

1. 祇園女御は『平家物語』の中では謎の人物である。

本来はほんの脇役であったが、清盛の出生の秘密を握る人、と見られている。彼女はもともと白河法皇の愛人だった。都の東山の祇園のほとりに住んでいたために祇園女御といわれたという。しかし、この「女御」という称号は天皇のお妃中でも上位に属し、ちゃんとした宣旨、すなわち公の命令が無くては名乗ることは許されないものであった（注7）。

前にも述べたように、昔から天皇には妃が何人もいた。一番上位の正夫人が中宮、または皇后で、その次が女御、それから更衣という順である。そして女御になるには皇族出身の女性か、または高位の貴族の娘である。白河法皇は平安朝末期に最初に院政をはじめた人で、権力もあるかわりに、私生活もかなり乱脈だった。そして白河法皇の数多くいる側室の中でも、特に寵愛された一人であろう。そして『平家物語』では、彼女はかつて白河法皇の寵愛を受けていたが、のち平忠盛の妻になったという（巻六「祇園女御」）。すなわち貴人のお手つきの女性を臣下に払い下げたということだ。しかも忠盛は褒美として彼女を賜った、と『平家』は書いている。詳細は詳らかではないが、要するに忠盛の沉着冷静な処理の仕方が白河法皇に認められ（巻一「殿上の闇討」、巻六「祇園女御」）、忠盛は<sup>たじまのかみ</sup>但馬守に任じられ、「内の昇殿」を許され、そして更に副賞として彼女を貰い受けたということである。

忠盛が誰を妻に貰おうが、この物語には関係が無いように見えるが、ここで問題は清盛が白河法皇の落とし種、すなわちご落胤であるかどうかということだ。法皇が忠盛に祇園女御を賜るとき、祇園女御は身ごもっていたという。白河法皇は

産めらん子、女子ならば朕が子にせん。男子ならば忠盛とりて、弓矢取りに仕立てよ  
（巻六「祇園女御」）

といている。そして『平家物語』では同じ巻六「祇園女御」の項で更に

いもが子にはふほどにこそなりにけり

とか

夜泣すとただもり立てよ末の代に清く<sup>さか</sup>盛ふる事もこそあれ  
それよりしてこそ、清盛とは名のられけれ

と一方では白河法皇に子供のことを報告し、又一方では平清盛の名前の由来を説明している。しかし、このことについては多くの研究者が『吾妻鏡』や『中右記』、『殿暦』の記載を取り上げてその真偽を確かめているが、そのことに反対する学者もいる。例えば源師時の書いた『長秋記』では一方が栄光に輝く法皇の寵姫であり、一方はその前にひざまずいて、財力を尽くして奉仕するという立場から考えると、清盛は白河法皇の落とし種ではないという（注8）。

いずれにせよ、『平家物語』では、清盛をご落胤とするほうが出世に有利であると解した。しかし清盛が十二歳で兵衛佐<sup>ひょうえのすけ</sup>になり、十八歳で四位になったのを異例とし、だからこそ太政大臣にもなり、遷都もやっつけた、ということは、逆にもし清盛をご落胤であるならもっと早い出世をとげているはずである。物語の中では祇園女御の性格はほとんど描かれていないので、その虚像と実像は確かめようが無い。

## 2. 二代后<sup>にだいのききき</sup>

『平家物語』は軍記物語であるが、それは又年代を追って書かれた年代記でもある。この項の二代后は歴史の経過を説明するために置かれたもので、前の「祇王」、「小督」などの物語を完成するために一章或いは二章にまたがって書かれたものとは性格を異にする。

二代后は巻一「祇王」と「額打論」の間に挟まれている。しかし、「祇王」とは全く関係が無い。しいて言うならば、もう一つ前にある「我身栄花」に連なる性格を持つ。

まず本文は、平治の乱以後の社会情勢について書かれ、そして「我身栄花」の最後に清盛の海外貿易に対する政策の成果として

楊州<sup>こがね</sup>の金、荊州<sup>けいしゅう</sup>の珠、呉郡<sup>ごきん</sup>の綾、蜀江の錦、七珍万宝<sup>しちちんまんぼう</sup>一<sup>ひとつ</sup>として関<sup>かけ</sup>たる事なし

と中国の文物がたくさん入り、貿易が盛んになったということが書かれている。しかし、『平家物語』ではこれをただ「平家が金持ちになった」としており、「むしろ、平家時代になってから世の中が悪くなった」と前後矛盾する表現法を使っている。これを裏返せば、平家の進出によって落目になった公家層の不満だと解釈しても良い。これは前に述べた通りであ

る。もちろん作者は一人だけではないし、その上長い時間かかって、多くの人の手が加わり、今の形になったものと思われるのだが、それにしても中心人物は何人かいたと思う。

さて二代后について述べる。多子<sup>たし</sup>は近衛天皇の後であった。すでに天皇に先立たれ、太皇太皇后とよばれて、近衛河原のあたりにひっそりと住んでいた。といっても年はまだ二十一歳で、当時では「女盛りがやや過ぎた」という程度である。近衛天皇は三歳で即位し、十七歳でなくなった不運な天皇である。多子は天皇より一つ年下で、数え年十一で近衛天皇の後となり、五年後には、すでに未亡人になってしまった。したがってこの時点では二十一歳である（注9）。その若さと美貌が間もなく彼女を数奇な運命に追いつめ込むことになる。

その前にまず当時の天皇の系譜を見る必要がある。

白河天皇（72代、在位15年）——堀河天皇（73代、在位22年）——鳥羽天皇（74代、在位17年）——崇徳天皇<sup>すとし</sup>（75代、在位19年）——近衛天皇（76代、在位15年）——後白河天皇（77代、在位4年）——二条天皇（78代、在位8年）——六条天皇（79代、在位4年）——高倉天皇（80代、在位13年）——安徳天皇（81代、在位6年）——後鳥羽天皇（82代、在位16年）

すなわち鳥羽天皇にとって白河天皇は祖父であり、堀河天皇は父、しかしここから天皇の継承がおかしくなる。崇徳天皇、そして子の鳥羽天皇、鳥羽天皇死後は近衛天皇で、彼が死んだ後天皇を継承したのが異母兄弟の後白河天皇（崇徳天皇の兄）、そして二条天皇、六条天皇、その後は高倉天皇という複雑な継承問題が起きている。すなわちこれを整理すると、崇徳天皇（75代）と後白河天皇（77代）は兄弟で且つ弟が先に即位し、そして76代の近衛天皇と二条天皇は叔父、甥の関係である。そこで問題になるのがこの近衛天皇の後多子が、その甥の二条天皇に無理強い後にされてしまったことにある。簡単に言うと二条天皇は叔父の奥さん、すなわちおばさんに当たる女性を妻にしたことだ。

そこで『平家物語』で取り上げていることを次の二点にしばることが出来る。

①最初に人倫の道をはずれた二条天皇の行い、そして嫌だという多子、すでに太皇太皇后というれっきとした身分の女性を無理強い自分の后にしてしまうこと、これが『平家物語』では特に取り上げている。

② その上二条の父である後白河法皇が制止しても、二条天皇は

天子に父母なし。吾十善の戒功によって、万乗の宝位をたもつ。是ほどの事、などか敬慮にまかせざるべき（巻一「二代の後」）

（天子には父母はいない。だから父の言うことを聞かなくてもいいのだ。自分は前世に功德を積んだおかげで、いま天子の位についたのだ。このくらいのことを何で自分の思いのままにできないことがあるうか）。

と嘯く。「十善の戒功によって万乗の宝位をたもつ」というのは、仏教盛んな当時の天皇の位についての考え方である。このころの天皇は「前世の仏教の教えの十善を行った功德によって、天皇の位についた」、と言われている。十善とは十悪すなわち殺生、偷盗（ぬすみ）、邪淫、妄語（うそつき）、両舌（二枚舌）、悪口、綺語（まやかしの話）、食欲、瞋恚（いかり）、邪見（偏見）（小学館『国語大辞典』）、の悪行をしないということで、その戒めを守ったからこそ、俺は天皇になれたと二条はいう。

問題は主人公の多子である。日本史始まって以来最初の二代後の出現である。果たして多子は喜んでいったのか。『平家物語』には多子は全然行く気が無かった。そして何故近衛帝が死去したときに一緒に死ぬか、或いは出家するかしたら、今日の難題は降ってこなかったと後悔したが先に立たず、更に父の功能に「もし入内して皇子を生めば、嗚呼貴方は国母といわれ、私は外祖父として好運に恵まれるのだから、親孝行をと思って入内してくれ」、とまでいわれ、遂に二代後は誕生する。彼女の心を歌った歌に

うきふしにしづみもやらでかは竹の世にためしなき名をやむがさむ

（あの悲しかった先帝崩御の折に出家しなかったために、今、二代の帝の後となって、世に例のない評判を立てることになってしまった）（巻一「二代後」）。

では、その後の多子はどうなったのか。これほど二条天皇に懇願されて入内したものの、五年後にはまたもや帝に先立たれ、今度こそ落飾して北山の麓に移り住み、建仁元年（1201年）六十二歳でなくなった。当時としては長寿のほうである。

ここまでが二代後のあらましであるが、さてその裏に隠されている政治的闘争を見逃すわけには行かない。それにはまず院と天皇の権力争いについて触れなければならない。

二条天皇の祖父鳥羽上皇は孫の二条天皇を彼の生きている間に帝位につかせるべく、まず後白河天皇を即位させ、二年後には二条天皇を、そこには朝廷における帝位の争いがあ

った。そして何故二条天皇をして「天子に父母なし」と言わしめたのかを考えてみる。当時後白河天皇の側近には藤原信西と藤原信頼が対立し、源氏の武力を巻き込んで戦いが起こった。これが「平治の乱」である。その結果信西が殺され、信頼が勝利をつかんだが、そのとき熊野詣でに出かけていた平清盛が帰郷するに及んで、信頼及び源氏一族が倒された。そして清盛と密接に連携をしていたのが二条天皇およびその側近であった。この乱は二つの影を残した。一つは武士の勢力の台頭をもたらし、更には宮廷の争いを暴露した。そして「天子に父母なし」ということは、この果てしない権力闘争の勝利の発言で

「世をば院にしらせまいらせじ、内のご沙汰にてあるべし」（愚管抄）（注10）

その真相は二条天皇が後白河院に逆らった人事異動をやったとき、二条が「天子には父母なし。例え上皇の仰せであっても、政務に私情が加わるべきではない」と評した事であるが、このときの対立が院政か天皇親政かという根本問題を含んでいることを考えれば、そのどちらが正しいかは判じ難いが、『平家物語』では特にこの項で二条帝の横紙破りを強調しているが、肝心な二代后にはあまり触れていない。そしてこの結末は、皮肉にもその後後白河上皇の院政へと繋ぐ。

3. 『平家物語』の中に登場する王妃は、ヒロインともいうべき建礼門院を除けば、祇園女御と二代後の多子、それに一人加えると、建春門院が挙げられる。気鋭の二条帝が幾ばくもなく病気になる、その皇子（六条帝）に位を譲って崩御するが、その東宮には後白河院の子がたつ。これが後の高倉天皇で、建春門院がその母である。すなわち天皇の叔父が皇太子になったということである（巻一「東宮立」）。

建春門院は『平家物語』では別に大きく扱っていないが、この建春門院の項で見落とせないことは、①平清盛が娘徳子を入内させるにおいて、この建春門院（名を滋子、平清盛の妻時子の妹）が充分にその影響力を発揮していることと、②多子が二代に亘って妃を務めたり、叔父の高倉天皇（六歳）が甥の六条天皇（三歳）の東宮（皇太子）となるなど、宮中はまさに大荒れの状態を呈していたことである。

春宮は御伯父六歳、主上は御甥三歳、詔目あひかなはず（巻一「東宮立」）



しかもその数年後六条天皇は譲位する。その年わずか五歳、東宮の高倉天皇が即位し、御年八歳であった。ここに至って後白河院は名実共に帝の父として院政を執行する権利を掌握し、平清盛と急激に接近、又滋子の兄時忠が清盛の片腕となって活躍する。これはみな滋子（建春門院）の力が及んでいることを物語るものである。

#### 四、人妻たち

滅び行くものの興亡を描いた『平家物語』の中で、今まで比較的注目されなかったのは、平家一門の妻たちの生涯である。しかし、彼女たちはもともと悲惨で、無力でそして黙々とこの運命の急転に身を任せるほかなかったことを考え合わせると、本論文の意図するところが自然と明瞭となる。平家の男たちの生涯の悲劇は、自ずから選び取った悲劇である。都落ち、一の谷、屋島、壇ノ浦の合戦も、その選択が誤っていたかどうかは別として、自分の選んだ道を歩み、そして滅んだ。

が、彼女たちは違う。夫の選んだ道を押し付けられ、その中で傷つき、苦しんで死んだか或いは死よりも恐ろしい生を生きなければならなかった。しかもそれぞれの女たちは、世の中に対しては全くの無知で無能力な女であった。平家の貴人の北の方として納まっていたからこそ、どうにかこの世の中の荒波にも当たらずにきたのが、平家一族の滅亡は彼女たちをして急に素肌のままに放り出されたようなものであった。

二・三の愛人や妃たちは『平家物語』においては権力闘争の陰に泣く女性たちであったが、真の女性悲話はこれから述べる人妻たちである。いつの世にも戦乱はつきもので、その戦乱の中でもっとも深く傷つけられるのは、最も力の弱いものである。そしてここでは際立った生き方をした数人を取り上げ、その生涯を述べる。

##### 1. 小宰相

こざいしょう    たいらのみちもり  
小宰相は平通盛の北の方である。通盛は清盛の弟で門脇中納言といわれたのりもり教盛の子。

清盛死後、平家一門の総帥となったのは宗盛（清盛の子）だが、年齢や経験から言って、補佐役の筆頭は通盛であった。木曾義仲の都攻めに逢い、結果において平家一門は安徳天皇を奉じて西海へ落ち延びるが、このとき小宰相も通盛にしたがって都を捨てた。やがて平家は西海で勢力を盛り返して一の谷まで攻め上る。その間木曾義仲は没落し、代って鎌倉勢の義経が平家の軍隊と一の谷で戦い、平家は又敗れて海上に逃れる。この合戦で通盛は傷

を受け、敵に取り囲まれて戦死する。そして通盛は死に臨んで傍らにいた君太くんだのたきぐちときかず滝口時貞に妻に伝言を頼んだ。

なんじはいのちをすつべからず。いかにしてもながらへて、御ゆくえをもたづねまいらせよ。(巻九「小宰相身投」)

(お前は命を捨ててはいけない。どんなにでもして生き延び、北の方の行方をお尋ねしてそれに仕えよ)

小宰相はこの伝言で夫が死んだという事実を知らされ、夜具をかぶって倒れこんでしまう。そして最愛の人に突き放された気持ちで、遂に起き上がれなくなる。当時北の方は既に通盛の子を身ごもっており、新しい命の誕生を知らながら奈落の深淵に落ちた小宰相の悲しみ、これを『平家物語』ではいとも簡潔に描写している。

心にまかせぬ世のならひは、おもはぬほかのふしぎもあるぞとよ(巻九「小宰相身投」)

というのは、具体的には生き残っていて、心ならずも再婚しなければならなくなったりすることを暗示したものである。今は幽冥界を異にする夫婦の情愛、更にこれから生まれてくる子供のことを思い、小宰相は乳母の寝静まったところで身投げをする。正に人間地獄描いたものとして、『平家物語』のなかでも最高に心うたれるシーンである。まさに瀬戸内海の春の曙の中で行われた、凄惨にして且つ美しい海の鎮魂曲である。白い死装束をつけた髪の長い女人の死体が、夫の鎧を着けて静かに海に葬られてゆく。船も朧、人も朧、その中で進行した悲しみのパントマイム。ここで『平家物語』の描写について些細な異議を唱えるのも、小宰相の身投げに同情するあまりのものと考えて欲しい。

①『平家物語』ではその後に「忠臣は二君につかへず、貞女は二夫にまみえずとも、かやふの事をや申すべき」(巻九「小宰相身投」)と付け加えているが、これは甚だ非常識で蛇足に過ぎない。

女の生き方としてみるならば、この北の方の身投げにはいろいろなことが言えるだろう。

i 妊娠時の興奮による発作的な自殺。

ii 今まで幸せだった彼女が、襲ってきた不幸を受け止めきれず、逃避を選んだ。

iii 子供を産んで育てるべきだったのに弱すぎた

という意見が出てこよう。が、ここではこういう読み方は妥当ではない。『平家物語』がここで語りたかったのは、戦いで夫を失ったある若い妻の悲しみについてである。「彼女が生きていられないほどの衝撃を受け、自らの命を絶ったのだ」、という一語である。これは女性の、特に戦にまつわる人間心理で、古今東西を通じて常に変わらぬものである。自殺は敗北かもしれないが、一つの決意でもある。この時代では、たとえ夫が処刑されても妻子には罪は及ばなかった。生きれば生きられる身でありながら、彼女が自ら死を選んだ。若妻の死、そして薄墨色の暁の世界と白い衣をまとった小宰相の屍体と、極端な色の存在を拒否した死のドラマの美しさを、われわれは十分に味わうだけでも死者に対する弔意ではなからうか。

②「小宰相身投」の章には、更にこの後に彼女と通盛の恋のいきさつを付け加えている。これもまた蛇足というほかない。しかも『平家物語』が身投げの後に付け加えた二人の恋物語は、平凡で取り立てて言うこともないものであった。それで筆者が考えるに、『平家物語』の作者がこれを逆にして、この平凡な恋の経緯を始めに書いたら、その劇的効果も大きかったのではないかと思考する。

③さらに憶測を加えると、多分この章は、始めは身投げまでのものではなかったかと思う。それが次第に語り伝えられてゆくうちに、現実の通盛や小宰相を知る人も少なくなり、彼女がどんな人間で、二人の恋の経緯がどうだったかを聴衆は知りたくなり、語り手が説明の必要上後に付け加えられたのではないかとも思う。

## 2. 維盛の妻

前の小宰相と比べると維盛の妻は至って平凡な描き方で終始している。彼女は平家一門とともに都落ちもせず、又他の人妻たちのように海戦に巻き込まれることもなく、ひっそりと都に残って夫の安否を気遣っているだけの、無力で、何も出来ない人妻であった。

維盛は重盛の嫡男である。前にも述べたように、『平家物語』では重盛を極端に美化している。例えば、父の清盛が、<sup>ししがたに</sup>鹿ヶ谷で行われた反平家の謀議を知って、その首謀者の一人大納言<sup>なりちか</sup>成親を監禁すると、子供の維盛をつれて父の軽挙を戒める。又清盛がこの謀策に後白河法皇が荷担していたことを憤り、清盛が法皇の御所に押し寄せるために兵を集める。そのとき重盛は

忠ならずんと欲すれば孝ならず、孝ならずんと欲すれば忠ならず。重盛の進退ここに窮まれり(頼山陽『大日本史』)

と忠臣のお手本として重盛を扱っている。又巻一の「<sup>でんかのりあい</sup>殿下乗合」でも、重盛の<sup>すけもり</sup>子資盛が、路上で摂政家藤原基房の一行と出会い、下馬の礼を取らなかったことから、馬から引きずり下ろされ、恥辱を受けたとき、清盛は怒ってこれに報復しようとし、逆に重盛は侍たちをたしなめたということになっていう。がこの時報復の命令を出したのは重盛その人であつたらしいとも言われている(注 11)。すなわち『平家物語』では重盛は聖人君子であり、その子維盛にも最後に特殊な運命を与えている。

維盛も平家一族であり、しかも清盛の嫡孫である。しかし、維盛が『平家物語』に出てくるのは巻五「富士川」からである。頼朝が挙兵し、東国の軍団を率いて西上するに及んで、維盛は征討の大將軍として七万の兵を、それに対して源氏は二十万騎、まずこの数字の上での劣勢と、平家軍の東国兵に対する無知及びその強さに、戦う前から士気が衰え、水鳥の羽音に驚き、「さては敵襲か」と浮き足立ち、取るものもとりあえず逃げ出した。維盛は戦わずして敗軍の将となる。祖父の清盛にはかなりひどく叱られたそうだが、それでも間もなく少将から中将になる。その後間もなく木曾義仲が挙兵する。このとき維盛は大將軍だったが、有名な<sup>くりからとうげ</sup>倶利伽羅峠の合戦に大敗して都に逃げかえる。もうこうなつては平家一門で木曾義仲を迎え撃つ者はなく、安徳天皇とその母建礼門院を奉じて西国へ逃れる。図らずも、この二度の敗戦の将が維盛であつたことは皮肉である。

そして逃亡に際して、たいていの将は妻子をつれて行つたが、維盛は妻子を都に残した。維盛には妻との間に十歳の男の子「六代」と八歳の女の子がいた。その別れの場面において維盛はついて来る妻に

我日頃申ししやうに、一門に具せられて、西国の方へ落ち行くなり。いづくまでも具足し奉るべけれども、道にも敵待つなれば、心安く通らん事あり難し。たとひわれ討たれたりと聞き給ふとも、様など替へ給う事は、ゆめゆめあるべからず。その故にいかならん人にも、見もし見えて、あの幼き者をも育み給へ。情をかくべき人も、などかなくて候ふべき。(巻七「維盛都落」)

と西国に連れて行けない理由を述べ、更に万一私が打たれたら、出家などしないでどんな

人とでも再婚して身のたつようにし、幼い者達を育ててくれ。世の中にはきっと、あなた方に同情してくれる人もあるだろう、という。平家の嫡孫としての維盛の言い分は残酷であった。

残された無力な妻は哀れである。他の平家の武将の、死を覚悟した平静な都落ち（巻七「度都落」「経正都落」）に比べて、この維盛の都落ちはひどく生々しい。かくて平家一門そろって都を後にするのだが、維盛が妻子の顔を見るのもこれが最後になってしまう。しかも間もなく一の谷の合戦が起き、平家はまたもや惨敗し、討ち取られた人々の首は都大路を渡される。つまり見せしめのために人の目にさらされ、そして巻十の「首渡」では後に残された妻の不安な心理を見事に描いている。世をしのぶ身の上には、確かめる術もない夫の生死は、妻にとっては惨めであった。その後維盛が病気で一の谷の合戦には参加していないで、今でも屋島にいるという報せに矢も盾もたまず、手紙を持たせて維盛に走った。その手紙には

いづくともしらぬ逢せのもしほ草かきをく跡をかたみとも見よ（巻七「維盛都落」）

（どこでまた逢うとも知れぬ私たち、もし草のようなこの頼りない私の手紙を、せめて形見としてください）

都に妻子を置いてきたことで、総帥宗盛や時子（清盛の妻）にその誠意を疑われ、又妻との恩愛の契りに引かされて維盛は屋島を脱出する。しかし重衡のように生け捕りにされて恥をかくことを思うと、出家を思い立ち、高野山に入り、そこで前の「横笛」に出てくる滝口入道に逢い、彼の介添えで出家を遂げ、船を出して入水<sup>じゅうすい</sup>する。その噂を聞いた妻も出家するが、物語はまだ終わっていない。彼女には十二歳になった六代がいる。彼女は一応出家するが、鎌倉方は六代を捕まえに来る。すでに十二歳になった六代は覚悟を決め、母には「あまり拒んでも武士たちに踏み込まれたりすると、母君や皆の者の惨めな姿を見られてしまいます。とにかく行ってまいります。心配しないでください」と潔く鎌倉方に捕らえられてしまう。何とけなげな若君であろう。夫に先立たれ、今度は子供が捕まえられる、こんなとき何も出来ない自分の無力さ。今こそ自分が羽を広げて子供をかばうべきなのに、むしろ子供に力づけられ、正に平凡な妻の無力さを充分にさらけ出す。もちろんこれが当時の貴族女性に生き方であった。この平凡な女性は肩に背負いきれないほどの重荷を背負って、なおも生き続けなければならなかった。六代は十六歳で出家し、高野、熊野と父のゆかり

の地を廻る。彼も頼朝の死後殺されるのだが、十二歳から三十あまりになるまで命を保ったのは、ひとえに長谷観音のおかげであると『平家物語』は言っている。

この物語の作者は前述したように、滅び行く平家一門が、凄惨な戦いの中で殺され、或いは捕えられて首をはねられる中で、少なくとも重盛と維盛はそうした死に方を免れている。合戦で死んだものの落ち行く先は修羅地獄としか考えられない当時のことである。物語の作者がこの小松一門にだけは、全く異質の死後の世界を提供していることは、特に目を留めてよいと思う。そしてその理由として、それは「ひとえに信仰のおかげである」ということである。

仏の加護によって命が助かる、または地獄へ落ちなくてすむ、といった物語は『平家物語』だけでなく、『今昔物語』その他にもたくさん見られるところであるが、こうした物語の弱点は、信仰心篤い主人公を美化するあまり、人間の真の感情を描き出していない欠点をさらけ出す。重盛は完全な聖人君子であり、信仰心が篤いから天国に上った。維盛は敵前逃亡まででしたが、最後に仏の救いによって清らかに西国へ赴いた。しかし、維盛の妻はどうする。夫に先立たれ、その子を育て、その子供も奪われるという最大の不幸に一人で立ち向かわなければならなかったにもかかわらず、物語作者は通り一遍の同情の目でしか見ていない。この物語でもっとも不幸なのは、むしろ彼女ではないか。維盛自身は入水して極楽往生の望みを達したかもしれないが、後に残された彼女は、現世の苦悩を独りで担ってゆかなければならなかった。にもかかわらず、物語作者は、彼女の不幸についてはさほど筆を割いていない。

しかし、皮肉なことに、そのお陰で彼女はもっとも自然な形で、この動乱期を生きた人間の姿を代表しているといえないだろうか。おそらくさほど賢くもなく、世才もなく、夫と別れては生きてゆく術も知らない、極平凡な女であった彼女。悲しければ泣くよりほかない動乱の世の平均的人間の哀れさが、作者が故意に脇役として書いたにもかかわらず、物語の行間に滲み出ている諸々に人々は共鳴し、涙を誘うものである。

### 3. だいなごんのすけ大納言典侍（佐）

平家一門の中で、最も悲惨な一生を送ったのは平重衡（清盛の末子）の妻、大納言典侍である。彼女の父は大納言藤原邦綱で、本名はゆうし輔子、安徳天皇の乳母として出仕したので、父の官位をそのまま受け継ぎ、大納言典侍と呼ばれた。彼女の父藤原邦綱はなかなかのやり手で、当時、富裕の人として又実力者として清盛とも仲がよく、偶然にも清盛と同じ年に

死んでいる。

そして輔子が重衡と夫婦になったのも、多分父同士の結びつきによるものであろうし、又彼女が安徳帝の乳母となって仕えたのも、徳子の兄弟である重衡の妻であって見れば、至極当然の成り行きであった。なお、彼女と重衡の間には子供はいない。

が、安徳帝が即位した頃から平家の前途には少しずつ不幸の翳りが差し始め、やがて、彼女の運命も妙な方向へと押し曲げられてゆく。この運命の曲がり角というべき事件の発端が、夫重衡の南都出陣である。

重衡が南都出兵に当たって、その前の維盛以下の平家軍が戦いもせずに逃げ帰ったことに鑑み、今度こそは雪辱を期せんとして南都の僧兵を徹底的に掃滅しようと力んだことにその原因が潜んでいた。その頃南都の僧徒たちは、清盛に対してあまりいい感情を持っていなかった。この戦の総大将に選ばれたのが重衡であった。重衡にしてみれば、「俺は維盛のようなみっともない事はしない」という気負いもあり、南都へ猛攻をかけた。その折、彼は家来に民家に火をつけよと命じ、折からの風にあおられて東大寺や興福寺に飛び火し、伽藍を焼き、特に東大寺の大仏までも焼け落ちてしまった。そしてこのことが後に重衡に過酷な運命を強いることになるが、それはまだ先のことである。その後清盛は死に、木曾の猛進攻に平家は都を捨てる。その中に重衡と共に大納言典侍も加わる。彼女は何はともあれ、一行の守護する安徳天皇の側近であり、その世話をするという重大な任務を持っていた。

平家は一応屋島へ落ち着くが、そこから態勢を整えて一の谷に進撃する。そして鎌倉勢に破れ、重衡は副将軍として合戦に加わっていたが、不運にも生け捕りになる。重衡は都に連行され、三種の神器と交換するための政治的取引に使われる。「重衡を許してやる代わりに三種の神器を返すよう」という朝廷の要求で、結果的には平家に拒否される。交渉決裂によって重衡は鎌倉へ送られ、頼朝に処分を任せる。重衡が鎌倉へ行って、頼朝から思いのほかの厚遇を得たことは、千手前との出会いですでに述べた。しかし、今度は頼朝が許すといっても、寺を焼かれた南都の僧侶たちが納得せず、奈良へ連れて行かれて首を切られる。

ここで妻の大納言典侍は、夫以上の苦しみを味わう。その究極の場が壇ノ浦の合戦であり、彼女は恐ろしい戦いを二度まで身を持って経験する。屋島の方はいち早く船に乗って海上に逃れたからまだしも、壇ノ浦では海戦の真只中に巻き込まれてしまう。源氏もこの壇ノ浦の合戦ではそれこそ死に物狂いで戦い、いかにしても平家の息の根を止めうため、戦では婦女子にも手を出し、容赦なく襲いかかった。かくして半生をごく順調に過ごしてきた大納言典侍は、夫とは切り離され、平安朝四百年の間、貴族の女性がかつて体験しなかった修

羅の世界に投げ込まれる。

安徳帝を抱いた二位の尼時子と、建礼門院の入水を目のあたりにし、大納言典侍も毅然として三種の神器の鏡（内侍所、神鏡）を入れた<sup>からびつ</sup>唐櫃を抱えて海に飛び込もうとした。自分の不幸を泣くよりほかに仕方のなかった彼女ではあったが、最後に及んで気を取り直し、神器である鏡をわが手で処分しようという悲壮な覚悟は健気であった。ところが彼女の最後の大挙も源氏の兵の射た矢に袴の裾を射られ、とうとう鏡は源氏の兵の手に渡った。こうして彼女は男どもに捕らわれてしまう。

建礼門院の都入りに従って都に戻った彼女は、姉の<sup>だいぶのさんみ</sup>大夫三位を頼って日野へ隠れ住む。そこで彼女は重衡がまだ殺されていないことを知る。「それなら今一度顔だけでも」と思うが、その自由はなかった。そして重衡が鎌倉から奈良へ護送されると聞き、日野が通り道であることを知り、夫に会いに行く。もちろん重衡も壇ノ浦の結果と妻の様子を知っているので、「もう奈良へ行けば、助からぬ命」と思い、源氏の兵に妻との面会をお願いする。その願いが聞き入れられ、そして二人は最後の面会の時を持つ。

再会した二人の間に、まず先立つのは涙であった。重衡は半身を<sup>みす</sup>御簾の中に差し入れてこれまでのことを語った。そして語り終えて額の髪の届くところを口で食いちぎって、「これを形見に」と渡した。もちろん大納言典侍も涙。そして彼女は夫のあまりにもみすばらしい姿に、彼女は袷と浄衣を出して「せめてこれを」。重衡は早速それに着替えてもとの着物を形見に置く。そして別れに一筆

せきかねて涙のかかるからごろものちのかたみにぬぎぞかへぬる

（止めかねた涙に濡れたこの衣を、後の形見として脱ぎかえてゆきます）

妻は聞きもあえず

ぬぎかふるころももいまはなにかせんけふをかぎりのかたみとおもへば

（せつかくかえられたお召し物も、今日限りのお別れかと思うと、どうしたらいいかわかりません）

まさに涙と涙。重衡の最期は、平家一門の貴公子たちの中でもまことに見事なものであった。首を切られた重衡の首は般若寺の大鳥居の前に釘打ちされたが、大納言典侍は、せめて



体だけでも貰い受けて供養したいと思い、それを日野へ持ち帰った。

「是をまちうけ見給ひける北方の心のうち、をしはかられて哀也」

と『平家物語』は書いている。一方では重衡の死体がすでに腐敗した様を「あらぬさま」と書き、この残酷な場面の描写をも敢えて辞さない『平家』の作者は、首のない骸を待つ彼女の気持ちを「いたましい」、という月並みな言葉で表現している。もちろん彼女は出家し、後建礼門院に従って大原入りして一生を終えた。

## 五、二人のヒロイン

### 1. 建礼門院 徳子

『平家物語』の中の女性で、ヒロインと呼べるのは建礼門院であろう。平清盛の娘として生まれ、高倉天皇のお后となり、安徳天皇を生み、女御として最高の栄誉を与えられながら、平家没落と共に西海に逃れ、壇ノ浦で入水した薄倅の佳人。しかも、幸か不幸かその直後に助けられ、都に帰り、大原の奥の寂光院に余生を送ったという生涯は、まさに波乱万丈といってよい。

建礼門院の本名は徳子で、その入内にはお婆の滋子（建春門院）の力添えがあった。滋子が後白河法皇の寵愛を受けて生まれたのが高倉天皇である。滋子は清盛とは系統を異にする平氏の平親信の娘で、晩年の後白河法皇の寵愛を集めた女性であったため、後白河は高倉を愛し、六歳の高倉を皇太子の位につける。従って徳子と高倉天皇とはいとこ同士である。しかし、徳子の入内は一応政略的結婚として見なされ、他の公家衆には余り愉快的ことではなかったらしい。

徳子が入内したのは十六歳、高倉帝は十二歳の少年であった。これでは早急な皇子の誕生は望むべくもない。以来平家一門は徳子の懐妊を待ち続ける。従って恋人達のところへ出てくる小督局を徳子が高倉帝を慰めるために遣わしたというのは理にかなわないことがはっきりする。その後、徳子は難産の結果安徳帝を生み、一ヵ月後にはこの皇子を東宮（皇太子）に定め、二年後には父高倉帝の譲位を受けて数え年三歳で皇位につく。これは後白河法皇と清盛との関係がとかく円満を欠き、後白河法皇が鳥羽離宮に幽閉されてしまった時で、その間に立った高倉帝が苦慮の結果に下した打開策であった。徳子の生んだ皇子が皇位に

つき、清盛の外祖父としての地位が確立すれば、清盛の気持ちも和らぐだろうと思つてのことであろう。しかし、こうした苦労が重なってか、高倉上皇はその翌年に二十歳という若さで此の世を去る。そしてこの時を境に、徳子の運命は次第に傾き始める。

中宮徳子が建礼門院の称号を得たのは高倉帝の崩じたのちで、この院号は徳子に予想だにできなかった悲運を齎した。まず高倉帝の後を追うように清盛が死ぬ。頼政の挙兵はどうか片付けたものの、すぐその後で木曾義仲、源頼朝が相次いで挙兵する。清盛が死に臨んだ予感は当たり、平家軍は惨敗を重ね、最期に壇ノ浦へと滅亡の一途を辿る。もちろんこの逃亡にも建礼門院は従わざるを得ない。しかし、『平家』では此处にいたっても、建礼門院は物語の上ではまだヒロインではない。そして安德帝入水の項で『平家』は「先帝入水」という章を設けているが、建礼門院については「能登殿最期」の章で数行を費やして申し訳的に述べているだけで、助けられてから後、彼女は俄然ヒロインとして姿を顕わす。すなわち『灌頂巻』の出現である。

源氏に捕らわれた徳子は京都東山の麓吉田のあばら屋に住み、そこも火災で焼けたのでもっと奥の寂光院に移り、出家して先帝や実母二位の尼や、平家一族の菩提を弔い、静かに一生を終えたという。そしてこの物語の落ちとして後白河法皇が寂光院を訪れ、建礼門院の六道輪廻の説を聞き、その仏道に対する深い修業に感銘し、涙ながらに去ってゆくというくだりで幕をとじる。

そこで『平家物語』の書き方に少し私見を述べてみたいと思う。

①「灌頂巻」が最初からあったのか？

前にも述べたように、建礼門院が物語に出てくるのは平家滅亡寸前のことであり、その前はほとんど姿も影もない存在であった。『平家物語』の作者は、重盛、維盛を除いて、清盛一族を徹頭徹尾悪者として描きたかったことであろう。そして『平家物語』の根本理念は「仏道を信じたから罪が許された」という至って簡単明瞭な筋書きである。ところが助けられた建礼門院をどう扱うかが問題となる。従って多くの学者が言うように、「灌頂巻」はその後で付け加えられた可能性が高いというのも一理ある。

- i. その証拠に「灌頂巻」の前の「六代被斬<sup>きられ</sup>」では、その最後に「それよりしてこそ、平家の子孫は長くたえにけれ」という。これはいかにも『平家物語』の全篇を締めくくりにふさわしい言葉である。が『平家』が語られ、もてはやされていくにつれて、生き残った建礼門院がクローズアップされ、もう一度『平家』の総まとめの形で、「灌頂巻」が付け加えられたと憶測するのも無理からぬことである。

ii.『平家物語』は語りの文学である。そこでこの物語が語られてゆく過程で、読者、聴衆の欲求というのが出てくる。「祇王・祇女」とか、「小督」などでみてきたように、『平家物語』の中には本筋から離れた女性の物語がかなり多い。これが『平家』を受容する人々の好みに支えられて次第に膨らんできた。とくに事清盛の娘建礼門院となると話は別である。中宮であり、西海に逃れ、身投げしたという女性としては、思いも及ばぬ異常体験をしている。その上捕らえられて都へ戻って出家したというのだから、これ以上数奇な運命を辿った女性はいない。もちろん大衆がこれを見逃すわけではない。そして建礼門院の物語が語られてゆくうちに膨らんでいったことは容易に想像できることである。それが「灌頂巻」であった。

iii.又仏教的な考え方の影響を重んじる当時の人たちは、これを「女人成仏説話」とみているようだ。一方に重盛、維盛、重衡を描いて、平家の男の悟りへの道を語った「平家」の作者は、女性の代表として建礼門院をつれてきて、「六道輪廻」の体験の告白をさせる。「諸行無常」のことわりを説きたかった『平家物語』としては、最後に生き残った建礼門院と後白河を対面させ、結論めいたことを言わせたかったであろうし、六代が斬られただけで終わったのでは物足りなくなって、この部分を付け加えたのではなかろうか。

iv.しかし、物語は皮肉なもので、最後に付け加えられた「灌頂巻」は今では後世では最も有名であり、これが後から膨らんだ部分であるということを考え合わせると、正に瓢箪から駒である。「灌頂巻」という名は、平曲を語る琵琶法師が、これまでの十二巻ことごとくを習いおぼえ、最後に免許皆伝という形で教えられたところからつけられたものらしい(注12)。灌頂とはもともと仏教用語で、密教の研鑽修業に励んだものが、それを体得したしるしに頭から水を注がれること、つまり免許皆伝の卒業証書を貰うことである。しかも、その内容は建礼門院の悟りの告白である。その意味からいえば、この『平家』全体にとって「仕上げの巻き」でもある。

v.大原御幸はあったのだろうか？

これについてはあまり疑問視する人はいない。しかし、当時の公家日記『玉葉』(作者九条兼実)にはそういう記述はない(注13)。人間的に見て後白河法皇という人は、わざわざ建礼門院に逢いに行くような人とは思われない。もともと平家討伐の院宣を源氏に与えたのは後白河その人だし、また性格的にも、絶対に敗北者を顧みない人である。王者の冷酷さとでもいうべき後白河は、自らのために身を滅ぼした人を顧みたこと

は一度もない。その人が、わざわざ鎌倉方の目をかすめて建礼門院に会いに行くというようなことがあったかどうか。

## ②建礼門院の実像

要するに、この物語の有終の美を飾るにふさわしい建礼門院は、果たしてどういう女性であったか。彼女が果たして後白河法皇を前にして一大仏教論を展開するようになりし女性であったのか。それにしても物語の前部ではあまりにも影が薄いのはなぜか。そして彼女の実像とは如何なるものであったのか。

建礼門院の実像を伝える史料は極めて少ない。断定的ではないが、ごく平凡な、控えめな女性だったのではないかと思う。だからこそ、『平家物語』では影が薄く、最後の「灌頂巻」で主役を果たしたに過ぎない。『平家物語』から推論するに、父に言われればそのまま天皇に嫁ぎ、そのまま男を生み国母ともなるが、いったん落目になれば素手でそれを支える才覚もなく、いわれるままに都を落ち、周りが死ねといえど死んでも見せる。しかし、本心から固い決心をして飛び込んだのではないから、すぐ助けられてしまう。もし彼女が激しい気性の女性なら、こんなへまはしなかったろうし、また助けられた後でもいくらでも死ぬ機会があったはずである。が、彼女はついにそれをしなかった。そして生きられるだけ生きて五十八歳で此の世を去る。これを当時の北条政子（一、二歳の違い）の激しさに比べて見る時、建礼門院の性格がはっきりする。北条政子は人を激しく愛し、激しく憎み、そして自分もずたずたに傷つき、結果的には政子が鎌倉幕府を三代で終わらせ、鎌倉幕府は彼女が為に有名無実となる。その元凶が政子の激しい性格によるものであるとすると、果たしてどちらが勝利者で、どちらが敗北者かは簡単に言えるものではない。

## 2. 二位の尼 時子

一代の英傑の妻、そして後の母、平時子の前半生は、まさに人も羨むばかりの栄光に包まれていた。が、その後半生は、考えられる限りの無残さを集めて背負い込んだものだった。夫の死、一族の没落、孫を抱いての非業の死、日本一幸福でしかも日本一不幸だったのが二位の尼時子であり、一切は神のなせる業で、彼女はただ黙々とその運命に堪えた。『平家』を紐解くたびに人々が一番感動するのは、この運命に堪えてゆく時子の姿である。彼女は優れた女性でも何でも無い。いつの時代にもよくある平凡な妻であり、平凡な母である。たまたま夫が異例の出世を遂げたが、これも彼自身の才能によるもので、時子の内助の功とは

全然関係がない。だからもし清盛がさほどの人物でなければ、その時代によくありがちな中流貴族の娘として、ほぼ同じ階層に嫁ぎ、子を産み育て、ひっそりと死んでいったに違いない。

が、運命は皮肉なもので、当時の人間にしてはきわめてスケールの大きい、異常な才を持つ夫清盛が、両手に抱え切れない幸運を彼女に与えたが、後半生で彼女はひどく過酷な代償を払わせられた。この意味では時子はひどく夫運に恵まれたともいえるし、夫のお陰で苦勞させられたとも言える。ここでとくに時子を取り上げるのは、幸運に逢っても、決して有頂天にならず、又不幸の落目に逢っても自分を取り乱すようなことはせず、ベストを尽くして生きぬいた、ということに感動を覚えたからだ。

『平家物語』を平家一門の盛衰を語った物語とするならば、彼女こそまさにそのすべてを見、かつ自分自身で味わい尽くした人物であったと言えよう。例えば清盛は前半の栄華を築きはしたが、その終末は見ないで死んだ。重盛は平家の没落を予感しつつ、しかし同じくその終末を見届けないで死んだ。その他の息子達は、年齢的に幼かったから、物心ついた時には既に平家は中央政界にのし上がっていた。彼らはそれぞれに平家滅亡の悲惨は味わったが、上り坂にあるものの味わう意欲的な創造の喜びを実感していない。その意味で時子は主人公に据えられるべき人物であるが、『平家物語』の中で彼女の占める位置は極めて小さい。これは、他の人物達の場合と同様、『平家』の作者の興味が時子に注がれていなかったからであるが、しかしその反面、平凡な人間らしい時子像をそこに見ることが出来る。故意に作られた人物像、例えば重盛像の中には、むしろ非自然的な作為が目立ち、却って興趣をそがれるのに対して、時子についてはそうした思いだけをしないですむ。

時子は平時信の娘で清盛とは別系統の平家である。彼女がどういう経緯で清盛と結ばれたかははっきりしないが、このとき既に清盛は別の女性との間に重盛をもうけていた。清盛には分かっているだけで十八人の子供がいるが(注15)、確実に時子の子と思われるのは、宗盛、知盛、重衡、徳子で、その他徳子が壇ノ浦で助けられて帰ってきたとき、度々彼女を見舞った藤原隆房の妻や、信隆の妻も当時の情勢から察して多分時子の娘ではないかと思う(注16)。

時子の兄弟で注目すべきは兄の時忠である。彼の有名な「此一門にあらざれば人は皆人非人なるべし」という言葉は、その実「貴族として出世は出来ない」という意味で、『平家』ではことさらにこれを悪く言っていることは周知のとおりである。彼は姉妹のお陰で僥倖を得たというだけの男ではない。清盛はこの時忠の協力を得て、ぐんぐん出世していく。そ

して恐ろしいまでに膨らんでいった清盛の運勢は、彼女に晴れがましくも二位の位を齎した。娘が立后するとその母親にも相当の位が与えられるのがその頃の慣わしであるから、これは多分娘の徳子<sup>じゅだい</sup>が入内し、遂に中宮になった頃ではないかと思う。

そして清盛の死である。『平家』ではそれは仏罰でその死に方は「あっち死<sup>じ</sup>」であった。その点は此处では省き、二位の尼時子に的を絞って述べる。清盛が死に、出家して二位の尼と呼ばれるようになるが、時子の周囲には一度にどっと悲運が押し寄せて来る。寿永二年木曾義仲の京都攻めに端を発する追討の為に北陸に下った平家は、倶利伽羅峠<sup>くりからとうげ</sup>で惨敗し、命からがら都に馳せ戻る。そして自信を失った平家は急遽都を離れて西国へ旅立つ。父の剛毅さはもとより、母の周到さも持たない凡庸な宗盛は、それでも平家の総帥である。時子は宗盛の決定通り娘の徳子や安德帝と共に都を離れて西国へ落ち延びる。一応は勢力を盛り返して一の谷まで攻め上ったが、ここでも鎌倉勢の義経に破られて平家はひたすら滅亡への道を歩んだ。そして不幸は重なるもので、彼女の一番愛した重衡が、源氏の軍勢のとりこになり、更に朝廷から三種の神器と引き換えの交換条件として利用される。これ以後『平家』の中には暫く時子は登場しなくなる。源、平両者の戦いが続き、その動きを追って軍記物語の性格を強めて行くので、彼女には目もくれなくなる。そして一気に壇ノ浦へと飛ぶ。戦局不利と悟った時子はいよいよ決心すべき時が来たと覚悟する。

二位殿はこの有様を御覧じて、日ごろおぼしめしうけたる事なれば、にぶ色のふたつきぬうちかづき、ねりばかまのそばたかくはさみ、神璽をわきにはさみ、宝剣を腰にさし、主上をいだきたてま（ッ）て、「わが身は女なりとも、かたきの手にはかかるまじ。君の御とともにまいるなり。御心ざしおもひまいらせ給はん人々は、いそぎつづき給へ」とてふなばたへあゆみいでられけれ。（巻十二「先帝身投」）

（時子はこの様子を見て、日ごろから覚悟していたことなので、喪服である鈍色の二枚重ねの衣をまとい、練絹<sup>ねりぎぬ</sup>の長袴の脇をとって腰にはさみこみ、神璽を小脇に、宝剣を腰に挿して、安德帝を抱えて「私は女だけれど、敵の手にふれられようとは思いませんぬ。君の御供をいたします。帝に忠をつくそうという人は急いで続きなされ」と言って船端に出た）。

死を覚悟した時の凛々しい時子の姿を、『平家』は簡単であるが深い感情をこめて語っている。それは追いつめられ、取り乱した形の死ではない。彼女がかねて用意していた喪服を

まどっていることによっても十分知ることが出来る。しかも神璽、宝剣を絶対に敵の手に渡すまいという健気な決心、この王位の象徴を肌身はなさず身につけ、帝を抱き、彼女は静かに船端に進み、御年八歳の安德帝を抱いて入水する。帝が「尼げ、われをばいづちへぐしてゆかんとするぞ」という問いにも、時子は「浪のしたにも都のさぶらうぞ」といっているところは息を飲みたくなるような場面である。「海のそこにも都はございます」というのは、幼帝をなだめすかすためのものではあるが、現世に絶望した女のあきらめと来世への願いをこめた言葉である。これは暁の上で病死するのとは違い、彼女は毅然とした態度、沈着さで死へ旅たってゆく。これまでもっとも凄惨な海上の死闘が繰り広げられていく中で、二人の死は誰よりも静謐な、浄福とでもいうべき光に包まれていた。この強さは日本の歴史の中でも稀に見るものである。もしかりに彼女が助かっていたら、案外平穏な晩年が待ち受けていたことであろう。というのは、何しろ安德帝の跡を継いだ後鳥羽天皇は彼女が自ら面倒を見た皇子であり、その乳母の夫能円は彼女の父違いの兄弟であるからだ。最後まで天皇と共に、つまり日本歴史の正統を保つものとして死んでいった。しかも神璽と宝剣を携えて。

## 六、結び

普通『平家物語』は軍記物として読まれており、女性はほんの脇役でしかなかった。しかし、院政から鎌倉へと移っていく数十年は日本の歴史の上では変革期であった。そしてこの変革期というものを最も鮮烈に経験した戦乱の時代の凄まじさは、ある意味では第二次大戦の比ではない。恋人たち、后たち、人妻たち、これまであまり注目を浴びなかった女性達の戦乱による戦争体験は特に悲惨であった。そのぎりぎりの生命のドラマには、はっと胸をつかれ、一縷の涙を催すに足るものがある。「戦争の陰に女性が泣いている」というのが本小論の意図である。そして此处でもう一度考えることは、『平家物語』は、彼女達がなぜ物語の主人公たり得なかったかということである。そしてこの物語は何を語り、何を語らなかった文学であるのか、これを説く手がかりは実にこの女性悲話にあると思い、この小論文を書いた次第である。

蛇足になるが、「先帝身投」で感動させられるのは、時子の最後である。ちなみに彼女に抱かれた帝は遂に分からなかったし、宝剣も見つからなかった。後に玉璽だけは海上に浮かんだと『平家』は言っている（注 17）。しかし、石が海上に浮かぶというのは少しおか

しい。考えられるのは『平家』の記述が誤りで、時子が持ってゆかず、どさくさにまぎれて武士に奪われたか、或いは全部見つからないというのでは格好がつかないので、玉璽だけは浮かんだことにして、別のもので適当に補いをつけたのかということだが、真相はわからない。なお安徳天皇についても、後で助かったという話が残っている（注 18）が、これはよくある伝説に過ぎない。いや悲壮な時子の執念を思えば、帝はやはり助からなかったとしてやるのが、せめてもの思いやりなのではなかろうか。

注：

1. 正木信一著 『「平家物語」―内から外から』（新日本新書） 新日本出版社 1996 年 9 頁
2. 大野順一著 『平家物語における死と運命』 創文者 1966 年 85 頁
3. 拾遺和歌集は平安時代、三番目の勅撰集で、集名の拾遺は『古今和歌集』『後撰和歌集』にもれたものを拾う意で、集の性格を示している。20 巻。歌数約 1350 首。撰者については花山院説と藤原公任説があり、成立も明確ではなく、1007 年までに成ったかとされる。藤原定家・久曾神昇著 『拾遺和歌集』 汲古書店 1990 年 219 頁
4. 正木信一著 『「平家物語」―内から外から』（新日本新書） 新日本出版社 1996 年 9 頁
5. 三木雅博著 『和漢朗詠集』 勉誠出版 1995 年 120 頁
6. 山下宏明編 『平家物語 研究と批評』 有精堂 1996 年 97 頁
7. 小学館 『国語大辞典』
8. 村井康彦著 『平家物語の世界』 徳間書店 昭和 48（1973）年 301 頁
9. 日本文学研究資料刊行会編 『平家物語』解説 日本文学研究資料叢書 有精堂 昭和 44（1969）年 288 頁
10. 谷宏著 『平家物語』古典とその時代 4 三一書房 1957 年 258 頁
11. 渥美かをる著 『平家物語の基礎的研究』 笠間書院 1978（笠間叢書；95） 156 頁
12. 上横手雅敬著 『平家物語の虚構と真実』 塙書房 1999 年 201 頁
13. 藤原為兼・次田香澄著 『玉葉和歌集』 岩波書店 1989 年 237 頁
14. 同上書 239 頁



15. 市古貞次編 『平家物語：諸説一覧』 明治書院 1970 年 55 頁
16. 西岡常博著 「『平家物語』を生きた人々」 近代文芸社 1995 年 222 頁
17. 同上書 235 頁
18. 同上書 240 頁

#### 参考文献

1. 大原富枝著 『大原富枝の平家物語』 集英社 1996 年
2. 大野順一著 『平家物語における死と運命』 創文社 1966 年
3. 山下宏明著 『平家物語研究序説』 明治書院 1972 年
4. 山下宏明編 『平家物語の世界』 大阪書籍 1985 年（朝日カルチャーVブック）
5. 山田昭全著 『平家物語の人々』 新人物往来社 1972 年
6. 山下宏明校注 校注古典叢書『平家物語』 明治書院 昭和 50（1970）年
7. 山下宏明編 『平家物語 研究と批評』 有精堂 1996 年
8. 上横手雅敬著 『平家物語の虚構と真実』 塙書房 1999 年
9. 三木雅博著 『和漢朗詠集とその享受』 勉誠出版 1995 年
10. 日本文学研究資料刊行会編 『平家物語』解説 日本文学研究資料叢書 有精堂 昭和 44（1969）年
11. 市古貞次校注・訳 日本古典文学全集『平家物語』 小学館 昭和 48（1973）年
12. 市古貞次編 『平家物語：諸説一覧』 明治書院 1970 年
13. 正木信一著 『「平家物語」内から外から』 新日本出版社 1996 年
14. 西岡常博著 「『平家物語』を生きた人々」 近代文芸社 1995 年
15. 村井康彦著 『平家物語の世界』 徳間書店 昭和 48（1973）年
16. 兵藤祐己著 『平家物語一＜語り＞のテキスト』 筑摩書房 1998 年
17. 角田文衛著 『平家後抄』 朝日新聞社 昭和 53（1978）年
18. 長野嘗一著 『平家物語の鑑賞と批評』 明治書院 1975 年
19. 砂川博著 『平家物語新考』 東京美術 1982 年
20. 高木市之助・小沢正夫・渥美かをる・金田一春彦校注 日本古典文学大系『平家物語』 岩波書店 昭和 43（1968）年
21. 高木市之助・永積安明・市古貞次・渥美かをる編 『平家物語』（国語国文学研究 史 大成九、三省堂、昭和 35 年。増補版、昭和 52（1977）年

22. 堀竹忠晃著 『平家物語論序説』 桜楓社 1972 年
23. 清瀬良一著 『天草版平家物語の基礎的研究』 溪水社 1982 年
24. 渥美かをる著 『平家物語の基礎的研究』 笠間書院 1978 (笠間叢書 ; 95)
25. 渡辺貞麿著 『平家物語の思想』 法蔵館 1989 年
26. 橋本義彦著 『平安貴族社会の研究』 吉川弘文館 昭和 51 (1976) 年
27. 藤原為兼・次田香澄著 『玉葉和歌集』 岩波書店 1989 年
28. 藤原定家・久曾神昇著 『拾遺和歌集』 汲古書店 1990 年 11 版